



# 100%魔法少女

ヴァレンタインロデー  
～お料理地獄篇～

上田ながの  
表紙イラスト: 鈴音れな

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された  
『HENTAI 魔法少女サイレントメロディー お料理地獄篇』  
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



イベント★  
魔法少女  
ワイルドメロデー  
～お料理地獄篇～

上田ながの  
表紙 / 鈴音れな

# 登場人物紹介

## Characters

---

ほうせんいんしずね  
**鳳仙院静音**

私立マリーアーヌ女学園で生徒会長を務めるお嬢様。とにかくペニスで女の子を可愛がりたいと考えているヘンタイさん。

### シフォン

魔法少女ミントの侵攻を止めるため、静音を魔法少女へと変身させるために現れた魔法少女。

### ミント

人間を抹殺するために魔法界からやってきた魔法少女。サイレントメロディーに敗れ、彼女無しでは生きられない身体にされてしまう。

「……う、嘘だろ？　こんな馬鹿な事……こんな事があつて……あつて堪るかよ」

フランス陸軍少尉であるマテオは呆然と呟いた。

彼の視界に映り込むのは、累々と積み上げられた仲間達の亡骸。マテオがヨーロッパ最強であると信じていたフランス陸軍は、ほぼ全滅していた。

それだけじゃない。

「パリが……俺達の花の都が……」

パリの市街地を守るべき市民達の亡骸が広がる。生者はどこにも存在しない。まさに地獄のような光景だった。

誰一人として動くものがない死の都。

「う、うう……濟まない。許してくれ。濟まない……」

ポロポロと涙が零れる。自然と膝が折れ、マテオは大地に平伏した。そんな彼の目の前に、一人の男の亡骸がある。

どこかに外傷があるわけではないし、苦しそうな表情を浮かべているわけでもなかった。その表情はどこまでも幸せそう。この地獄にはあまりに不似合いな表情だった。

そんな顔をしているのは、何もこの男の遺体だけではない。パリ中に倒れる市民、軍人——その全てが、笑顔たたえて死んでいた。

ただそんな笑顔の中に一つだけ奇妙な点がある。それは、笑顔を浮かべる全ての死体の

腹が、異様なまでに膨らんでいる事だった。男も女も関係なく、まるで妊娠でもしているかのように……。

「あ、まだいたんだ」

笑顔の地獄の中、涙を流し続けているマテオの背に、鈴の音のような声が届いた。

「——ひっ！ お、お前はっ!!」

反射的に振り返ったマテオの視界に映り込んだのは一人の女。

白いエプロンに白いコックコート。やはり白いコック帽を被ったコック姿の女がそこにいた。あまりに場違いな姿をしたその女は、ニコニコと笑っている。どこまでも無邪気な笑顔。胸元ははち切れんばかりに膨らんでいる。時折ブルンツと揺れる様が圧巻だった。街のレストランで見かけたら、きつと幸せな気分になれる事は間違いない。きつと視線はその乳房に釘付けになる事だろう。膨らむ胸によつてコックスーツによる皺が、何とも言えず魅力的だった。

だが、マテオは幸福を感じる事ができなかつた。

「ひっひいひいっ！」

陸軍少尉の口から悲鳴が漏れる。同時に持っていたライフルをコックへと向け、何の容赦も躊躇もなく、銃弾をばらまいた。鼓膜を狂わす程の銃声が辺り一帯に響き渡る。

だが——

「……これだから人間って野蛮だよね」

全ての銃弾は女コックの肉体に命中する直前で、ピタリッと空中で停止していた。まるで映画でも見せつけられているかのような光景。

「あ、ああああ……」

マテオは動く事もできない。

「大丈夫。そんなに怖がらないでよ。ほら、これでも食べて気分を落ち着けてさ」

怯えるこちらに対して笑顔を決やさぬまま、コックはニッコリ微笑むと、どこからかポトフを取り出した。食欲をそそる香りがマテオの鼻孔をくすぐる。

「い。嫌だ。し、死にたくない。俺はまだしに——んぐつ！」

開いた口に無理矢理ポトフが放り込まれた。

刹那——

「う、うううう……うんまあああああいいっ！」

マテオの表情から一瞬で恐怖が消え去る。死んでしまった市民、軍人達と変わる事のない幸せな表情が浮かんだ。

舌を蕩かすような味わい。ほっぺが落ちるようだった。思考が吹き飛ぶ。何も考えられなくなっていく。食べたい。思う存分この娘の料理を味わいたい。たった一口だけで、そこまで思った。

「大丈夫。まだまだ料理はあるからね」

そんなマテオの思考を読んだかのように、コックは更に料理を広げていく。どれもこれもが輝いて見えた。匂いを嗅いでいるだけで、天国に行ってしまった。

そしてマテオは——食い過ぎで死んだ。

\*

「う、うおえっ！ うええっ！ な、何だこの不味い料理はっ！ ひ、人の食いもんじゃないぞっ！」

私立マリアーヌ女学園家庭科の時間。料理実習室にミントの悲鳴が響き渡る。彼女は何度も嘔せ、口にしたカレーを流しに向かつて吐き出した。

「……失礼ね。作った本人の目の前で吐き出すなんて、マナー違反にも程があるわよ」  
そんなミントの反応に、ピクツと眉根を動かしたのは、私立マリアーヌ女学園生徒会長にして、

清楚、可憐、大和撫子、

純潔、乙女、美の化身、

であり、



人間界に対して侵略を行う魔法少女界の魔法少女達と唯一戦う事ができる魔法少女サイレントメロディーこと——鳳仙院静音だった。腰まで届く美しい黒髪を揺らし、宝石の様な瞳を、不快そうに濁らせる。

「マナー違反も何もあるかっ!! こんなクソ不味い料理を作る奴の方がよっぽどマナー違反だぞっ! なんだこれは、カレーだぞ、カレーッ! 誰が作ってもある程度はうまくいくだろ!」

静音の静かな物言いに、ミントは怒り狂う。

因みにこのミントも魔法少女である。しかも、人間界を侵略しにやってきた魔法界の尖兵だった。彼女の魔法によって北海道は消滅し、栃木の大半も人が住めない土地に変えられてしまっている。だが、そんなミントも静音に敗れ、今では静音の力がなければ生き続ける事ができない身体に変えられてしまっていた。

金色の髪に金色の瞳が印象的な少女。因みに胸はぺったんこだ。白いワイシャツに黒いマント。黒のスカートに魔法を思わせる三角帽子——というのが彼女の魔法少女としてのスタイルなのだが、今はマリアーナ女学園の学生服を身に着けている。太股まで届く黒のニーソックスが可愛らしい。

「言い過ぎですよミント。いくら静音様が気に入らないからって、料理を吐き出すのはやり過ぎです!」

そんなミントを銀髪お下げのシフォンが注意する。このシフォンも魔法界の魔法少女だ。ただし、シフォン自身にはまったく戦闘力はない。彼女にできるのは、適格者に魔法界の魔女達を遥かに凌ぐ力を与えるというものだった。その力によって、静音は魔法少女サイレントメモディーに変身する力を得たのである。

『人間界を侵略するなんて間違ってます』

それが静音に力をくれた理由だった。たとえ魔法界を裏切っても、間違った道は許せない——見た目の割に結構強い。

シフォンもミントもかなり人間界に溶け込み、今ではマリアーヌ女学園の生徒となっていた。

身に着けているのはやはりブレザー制服。人間界に来たばかりの頃に身に着けていた中世貴族を思わせるドレスも似合っていたが、この制服もまたばつちりフィットしている。特に胸元が最高だ。同年代の少女達よりも大きな乳房が、服の下でブルンブルン揺れている。すぐにでもシャブリつきたくなるような光景だ。静音もよく視姦してしまう。オッパイプルンプルン。

「そ、そんな事言ってもな……本当にまず——」

シフォンに対して言い返そうとするミント。が、

「そうよそうよっ！ 静音様の料理を粗末にするなんて、罰当たりにも程があるわっ！」

「最低よ」

「馬鹿じゃないの」

それを他の生徒達の罵声が掻き消す。ミントに向けられる生徒達の声は、本物の怒りに充ち満ちていた。

私立マリアーヌ女学園において、静音を貶める事など絶対に許されない。生徒達にとって静音の存在は、女神にも等しいものだったからだ。

「ふふんっ」

そんな彼女達の声に、静音は得意げに腰に手を当て、胸を反らす。

（可愛い子達ね。今日はたっぷり可愛がってあげましょう。そうね……たまにはクラスみんなを同時に抱いてあげるつても趣があつていいかもしれないわね。みんなのマ○コの味を同時に比べてみるのも楽しいかも……ああ、考えるだけで勃起しそう）

ただ、得意げにしても考えているのはそんなこと。シフォンの力によつて股間与えられた魔法のステッキマジカルペニーが、むくむくと大きさを増そうとしていた。

「だ、だったら、そんなに言うならお前らが食べてみるよ。私の分までお前らに譲つてやる！ それでまだ文句が言えるなら、甘んじて受けてやるよ！」

責め立てられたミントは少し押され気味になりながら、静音の作つたカレーを指差した。そんな彼女の態度を、フツと静音は鼻で笑う。

たとえ勝てる可能性が僅かでも……」シフォンは本気で感動したのか、ぼろりと一滴の涙を零した。

「……まあそんなところよ」

（そう、引くわけにはいかないわ。あんないい女なかなかないんだから。絶対に私ものにしてやるわ。コック姿の美女を、私のマジカルペニーでヒーヒー言わせてやる。子宮まで挿し貫いてやれば、どんな声で啼いてくれるかしらね。あのでかいおっぱいを鷲掴みにして、チューチュー吸うの。ああ、楽しみ。濡れるわ）

綺麗な涙なんて静音には届かない。九州の危機だという現実さえ、料理以外は完全無欠のお嬢様には二の次だった。大事なのは自分の欲望を如何に発散するかという事。特に今回は、ミントに散々馬鹿にされたので鬱屈したものがかなり溜まっている。

「よし！ 変身よっ！」

宣言と同時に静音はスカートを捲り上げ、何の躊躇もなくショーツを脱いだ。自慢の魔法のステッキマジカルペニーが露わになる。既に勃起したそれは少女の股間についているものとはとても思えない程に醜悪な姿だった。

ビクビクと震える肉茎には、幾本もの血管が浮かび上がる。カリ首は大きく広がり、肉先からは既に半透明の汁が溢れ出していた。

「……あ、あの……ミントの前でするんですか？」

変身するにはシフォンをマジカルペニーで犯さなければならぬ。

「当たり前でしょ。時間がないんだから！」

「ひえええっ！」

シフォンが悲鳴を上げるが容赦する気などさらさらなかった。ただシフォンを犯すだけでは変身は成功しない。より大きな屈辱を与える事が必要なのだ。今回はミントの前で犯されるといふ屈辱を与えてやる。

静音はあっさり彼女の身体を捕らえると、するすると職人芸のように銀髪魔女が身に着ける制服のスカートを捲り、ショーツを横にずらす。当然彼女の膣はまだ濡れていないのだが、時間がないので愛撫は省略し、彼女の身体を押し倒してテーブルの上に寝かすと、そのまま肉棒を挿入した。

ずぶじゅっ！ ぶじゅじゅじゅっ！

「ひきっ！ ま、まだ濡れ、濡れてませんんっ！」

とはいえ、マジカルペニーは簡単にシフォンの膣に沈み込んでいく。これまで散々犯し抜いた成果だった。肉壁がすぐに肉茎に絡みつく。柔らかな、それでいて暖かい感触に、思わず静音も「はあああ」と歓喜の息を吐いた。

「シフォンのマ○コは本当にヒダヒダが多くて堪らないわ。それにもう愛液が溢れてきた。お漏らししたみたいにびしょびしょに濡れてるわよ。んんんん」



頬を染めながら、銀髪少女に語りかける。彼女の髪を撫で、首筋にキスをする。唾液をわざと大量に分泌させ、舌で彼女の細首に塗りたいかった。同時にブレザーを捲り上げ、シフォンの上半身までも露わにする。巨乳を包む美しいレースのブラジャーが姿を現した。それさえも容赦なく外す。ブルンツと乳房が弾けた。

「み、見ないで……く、くださいい！」

恥ずかしそうにシフォンは顔を背ける。

「見ないでじゃないわよ……。本当は見られたいんでしょ？ ほら、ミントに見られて興奮してるんでしょ？」

恥ずかしがっても容赦なく責める。彼女の頬を掴み、ミントの方へと無理矢理顔を向けさせた。

「え？ あ……」

ミントは戸惑いながら、申し訳なさそうな表情を浮かべる。ただ、その頬は赤く染まり、太股をもじもじと擦り合わせていた。

「や、み、見ないでっ！ あっあっ——見ないでよミントオっ！」

性行為を見られている。その現実を突きつけられ、シフォンは悲鳴を上げた。それと同じ時に、露わになった乳頭が勃起を始める。可愛らしいピンク色の乳首が、ピンピンに勃ち上がった。

「ほら、こんなに勃起してる。乳首がピンピンよ。ミントに見られてそんなに……はあはあはあ……こ、興奮しちゃったの？ んんんん」

ぺちゅっ！ くちゅっ！ ちゅるるっ！

語りながら舌を乳首に這わせ、頬を窄めて胸を吸る。

「い、いわないで下さいいいい——あっあっあっ」

途端にシフォンの口から嬌声が上がった。そんな彼女の膣奥に向かって、何度もペニスを叩きつける。ピストンを打ち込むたびに、銀髪少女の口からは「ひんっひんっ」と悲鳴が上がった。膣道が収縮し、マジカルペニーを締め上げる。身体中を媚肉で包まれているかのように感じた。

「おっおっおんんんっ！ ふんっ、ほおおおっ！」

お嬢様の様な外見に似合わず、獣のような嬌声を静音は上げてしまふ。静音の女としての部分も、いつしか愛液で濡れそぼち、ピンク色の肉襞が覗き見え始めていた。

本当にいつまでも堪能したい。何時間でも黴っていたかった。

「おい……へ、変身するなら早くしろよ……あん、あんまり時間ないんだからな」

が、そういうわけにもいかない。ミントだつて顔を赤くして、どこか気まずそうにしながらも、現実を忘れないように忠告してくる。

「ふんっふんっふんっ……わ、分かつてるわよ。いい、シフォン……すぐに流し込んであ

げるからね！」

じゅごっじゅごっじゅごっじゅごっ！

「ひっひっひいっ！ は、はげっし、激しすぎますっ！ あっ、そ、んなっの！ あああああっ！」

静音は「はへっはへっ」と犬のように荒い息を吐きながら、シフォンの悲鳴を無視して腰を振り続けた。

一突きごとに肉壁の収縮が強くなっていく。カりに肉襞が引っかかり、震えが起きるよ  
うな快楽が背筋から脳天へと駆け上がっていった。一気に射精感が増幅していく。マジカ  
ルペニーの先端部が破裂しそうな程に膨らんでいった。

「くっる！ で、射精でるるわっ！ あっあっ！ てい、ていんくっる、ティンクル、ふわ  
ふわわりんっ！ まほ、りか、まほりか、き、らきらりん！ マジカルシャワーでい、  
いい子になあれっ！ い、イクッ！」

唱えるのは魔法の変身呪文。完成と同時にズンツとシフォンの膣奥へと肉棒を叩き込み、  
どびゅっ！ びゅぽぽっ！ どっびゆるるるうっ！

「んひっ！ あ、あつつ、熱いのが、で、射精てるっ！ あっあっ、あああああっ！」  
激しく射精を始めた。

我慢に我慢を重ねた排尿時にも似た快感が身を包む。ブルブルと完全無欠のお嬢様は何



度も身を震わせながら、魔法のザーメンを流し込み続けた。

その絶頂とほぼ同時に、静音の身体を魔法の光が包み込む。今まで彼女が身に着けていた制服が消えていった。美しいお嬢様の裸体が露わになる。

乳房が瑞々しく弾け、醜悪な肉棒が生える股間部が日の光を浴びて艶やかに輝く。絹のように白く美しい柔肌が光を放った。

光の中で現れるのは、ピンクを基調とし、過剰なまでにフリフリ、フワフワなりボンで装飾されたドレス。胸元には宝石が青く輝く。頭部にも可愛いリボンが施される。白いシルクで構成されたニーソックスが太股まで包み隠した。手にはシルクの手袋。やはりピンクのブーツが可愛らしさをアピールする。踵部分に施された羽根型のアクセサリーが特徴的だ。

そう、そこにいるのは私立マリアーヌ女学園生徒会長である鳳仙院静音ではない。

「天が呼ぶ地が呼ぶ人が呼ぶ。悪を倒せと私を呼ぶ。そう、私は、私こそが正義の使者。光の顕現。魔法少女——サイレントメロディーよ♪」

まさに完全なる魔法少女だった。

「……じゃあ行ってくるわ」

「ふあ、ふあい……」

力なくシフォンが頷く。

その答えは、すぐにアリエル自身がその身体で理解する事になった。

ドグンッ！

「んあっ？ へ？ な、何？ 何がお、起きてるの？ お、お腹、お腹の中で何かが……んおっ！ おっおっおっおほっ！ し、しきゅ、子宮の中で、何かがうご、うごいてる！」  
下腹部が疼きだす。子宮の中に異物感を覚える。それも一つや二つじゃない。五つ、六つ、七つと異物はどんどんその量を増していった。

「な、にがっ——っひ！ 何なのこれえ!!」

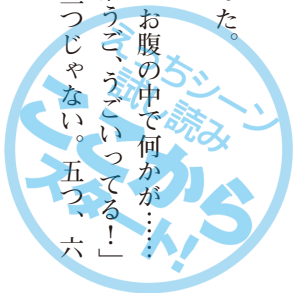
テーブルから立ち上がり、エプロンを捲り上げる。ズボンとショーツは消えたままであり、パイパン性器は露わになったままだった。そんな秘裂の少し上層部の臍の辺りが、ぼつこりと膨らみ出している。腹の内部から、空気を入れられた風船のように腹が膨張し始めている。

「おっ、なに、をしたの？ こ、こんなつの……おっおっおっ……」

下腹が張っていくのが苦しい。が、ホワイトミックスジュースによって敏感に変えられた肉体は、その苦しみすらも新たな快楽として感じ始めていた。

「何をしたも何もないわ。簡単な事よ。貴女のお腹に卵が着床してるのよ。ほら、何せいから井ですもの。いくらを産む鮭の気分まで味わってもらわないとね」

「そ、そんな……」



無茶苦茶な話があつていい筈がない。だが、実際下腹部の異物感が増していくばかりだった。

「んおっ！ おほっ、ほっほっほおおっ！ お腹が、な、中から、や、破られちゃう。破れるの、このままじゃお腹があっ！」

両膝が地面に落ちる。アリエルはそのまま上半身を地面に倒す。ただ座っているのが辛い。腹の膨張に合わせて感じる苦しみと、その苦しみによつて増幅する肉悦がアリエルを責める。

「大分来てるみたいね。でもねお客様……この料理はいくら丼を食べるだけでは完結しないんです。本当に大事なのはここから」

苦しむアリエルにサイレントメロディーがゆつくりと近づいてきた。彼女の口端からは涎が垂れ流れている。

「貴女のお腹の中にある卵に、ホワイトソースをかけないといけないんです。それによつてお客様は出産が可能になるというわけ。ですから……失礼致しますね」

微笑みながら、サイレントメロディーがマジカルペニーを膣口に密着させてきた。にちやつ！

粘膜同士が擦りあう音が響く。

「や、やめっ——そ、それだけはだ、だっめ……んいいいいまは、いまはだんめえ。は、

はいらないかつら……おっおっお、なか、い、いっばいで……は、はいら——んぎゅううううううっ！」

「肉棒一丁はいりまゝす♪」

ずじゅっ！ ぶじゅずっ！ びゅじゅぼおおおっ！

制止の声は欠片も届いてくれなかった。まるでこの行動が当然であるかのように、変態魔法少女は肉棒を膣内へと挿入してくる。巨棒によって肉壁は簡単に拡張され、膀胱が内側から押し潰された。

じよぼっ、じよじよじよおおおっ！

「お、おしっこ、おしっこでつて……んほっ！ ほあっ！ ほああああっ！」

勝手に小便が出てしまう。これによってサイレントメロデーの下半身もぐしよぐしよに濡れそぼった。が、彼女はまるで気にしない。

「いいわ……んっんっ、し、シフォン程の締めつけはないけど、肉壁がミミズみたいにペニーに纏わりついてくる。ほら、ふうっふうっ……わかるでしょ？ 肉の一枚一枚が、私のカ리를締め上げてるのが……ああ、最高……あっあっあっ。それにこのおしっこ、凄く温かい。堪らないわ」

それどころか寧ろ悦び、更に腰を膣奥へと突き出してきた。

「も、もうむっり、それ以上はむ——おっおおほおっ！」

ただでさえ卵によって圧迫されている子宮を、肉先が更に押し潰す。瞬間、ビュバツと小便だけでなく愛液も飛散した。

そしてこれが引鉄になる――

ずじよぼつずじゆぼつずじゆぼつずじゆぼつ！

「ああ、最高つ！ たまんない！ 止められない。腰を止められないわ！」

まるで猿だった。魔法少女が欲望のままに腰を振りたくる。こちらが先程まで処女だった事への斟酌も存在しない。自分が気持ちよくなる為だけの動きだった。ズンズンツと肉先が何度も膣奥を叩く。

「だ――つぶ、つぶれ――おなつかが、あつあんんつ！ ひっ！ くひっ！ あつ、あーあーあーあーあーつ！ い、いいっ！ 気持ちいいっ！ だつめ、お腹つかれ、つるの、きも、つち、よすぎつる！ ひーひーひおおおおつ！」

が、その乱暴な動きも、アリエルの肉体は快樂として享受してしまった。子宮口を突かれるたびに、腹が潰されるような錯覚に陥るが、それさえも心地よく感じてしまう。これがお料理対決であるという事さえ、一瞬で魔法コックの頭からは消え去ってしまった。

じゆずつじゆずつじゆずつじゆずるるるつ！

ピストンに合わせるように、自分自身も何度も腰を振る。いや、振ってしまふ。何も考えられなかった。

二人の魔法少女が「おっおっおっ！」「あーあーあーあー」と悲鳴を上げ、獣のようにまぐわい続ける。体液や汗が混ざりあい、異様な匂いを周囲に漂わせた。

「ああ、い、イクわ。貴女の膣中に、マジカルザーメンたっぷり射精すわっ！」

「お、おつき、おつきくて、か、かたつい！ あ、熱いいいいっ！」

やがてマジカルペニーは破裂しそうな程にまで膣中で膨れ上がる。硬度と熱気も増し、今にも膣内を焼かれてしまうのではないかとすら感じた。

そして――

ずぼじゅっ！

止めとばかりに肉先が膣奥へと叩き込まれ、

「で、射精するっ！ ほっほっほああああっ！」

びゅぽっ！ どびゆるっ！ びゅっぶびゅっぶびゅっぶびゅぶるるるっ！

尋常とは言い難い程に大量の白濁液が、卵が詰まった膣内に撃ち放たれた。

「んあああっ！ あぢゅっ、あぢゅいいいっ！ や、やけろ、膣内やけろしひゃうっ！

あっあっあっ！ わ、わたひも、わたひも、い、イクのおおおっ！」

腹に溜まる白濁液。それがアリエルの肉体も限界以上に押し上げる。あっという間に頭の中は真っ白になり、魔法コックも絶頂に至った。

「はああああ……さ、最高だったわ……ふふ。貴女も気持ちよかったですよ？ でも、貴

女の天国はまだまだこれからよ……うんっ！」

じゅぽっとペニーが引き抜かれる。たたりつと膣射精しされた白濁液が一筋流れ落ちていった。

「こ、これから？」

絶頂後の気怠さが身を包む。正直このまま眠ってしまいたいとさえ思った。が、サイントメロディーの聞き捨てならない言葉が耳に届く。

「ええ。すぐに分かるわ」

「すぐにつて……おっ、くほっ！ ほあっ！ あっあっあんんんっ！」

敵の言葉通りだった。変化はすぐに身を襲う。たつぷりザーメンを注ぎ込まれた子宮内の卵が、蠢きだしたのである。動き、向かう先はぱっくりと開いた膣口。

「うま、うまれっる！ 生まれるうっ！」

アリエルによるいくら出産が始まった。

小さな膣道が多量の卵によって不気味な程に広げられる。パクパクつと膣口が何度も震えた。臀部まで震える。全身に浮かび上がる汗。

膣道を圧迫される苦しみと、圧迫感によって生まれる気持ちよさ——二つの感覚がアリエルを責め立てた。

「い、いやっ！ う、産みたくない！ い、いくらなんか産みたくないよおっ！ ひっ！

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**